

# 会 報 第 6 号

「 今井研卒研究生の会 」

2005. 3. 31

## 1. 2005 年 を 迎 え て

今 井 哲 二

2005 年を迎えて「会報第 6 号」を皆様にお届けすることになった。1905 年、アインシュタインの相対性理論・光子仮説の発表を原点とし、今年で 100 年目、今年が「国際物理年」とされている（これに関連したことは次号会報で触れたいと思う）。

昨年は、日本を含め世界的に多事多難な年であった。誰しもが平穏で心豊かな日々の生活を求めながら、それとは程遠い体験を強いられるのが現実である。本会の会員諸兄にとっても、それは例外では有り得ない。

この会の「懇親会」にはついに一度も顔を見せることも無かったし、本会報に「寄稿」をすることも無かった新妻英雄さんが、76 歳を一期に昨年 11 月、この世を去った。本会報「第 6 号」は、前半を新妻さんを偲ぶ「追悼特集」に当てた。そして、前号（第 5 号）に引き続き、「第三回懇親会」での皆さんのスピーチ・テープから稿を起こしたものが本号の後半を埋めることになった。



会員諸兄の大部分は定年期を過ぎ、それぞれに第二・第三の人生をそれぞれの価値観の許に歩んでおられる。それぞれにとって唯一無二の人生である。現役時代の仕事をバネに、新しく取り組んだ仕事で光り輝いている方、転職により新たに道を切り開こうと努力している方々、それぞれに対し心からなる声援を送りたい。また、あるいは心ならずも（？）悠々自適の生活の中に生甲斐を求めておられる方も多いことであろう。これらの方は身近な「我が友」である。

高齢化社会を迎えた今、日野原重明氏が提唱するように、75 歳以上を「新老人」と称し、新老人によるパワーが日本の社会に生かされるようになれば、それは誠にハッピーなことである。しかし、願って得られる人もいれば、得られない人もいる。各自そのことを銘記しながら弱い立場の人達が生甲斐を見出せる日本になってほしい、と切に願う。

話はそれるが、次号会報の話題を提供しておきたい。近年、「青色 LED」について、テレビ・新聞などのマスコミが大きく取り上げ、中村修二氏の名前を知らない人は珍しい、と言ってよい。今年の朝日新聞 1 月 22 日（土）朝刊『私の視点』欄に拙稿が載った。本会会員も二、三の方は既に読んでおられ、感想を寄せられた方もおられる。次号では、この記事を紹介し、これに対する様々なコメントなども載せてみたい。予め拙稿に目を通される方がおられ、その感想を次号に寄せて頂ければ、と思っている。

なお、この話題で予備知識を得る時間的余裕のある方には、次の単行本を紹介しておきたい。

中嶋 彰著：

『青色』に挑んだ男たち』日本経済新聞社発行 2003 年 10 月 24 日 ¥1,800

